

チエーリツプ 四季だより



『私の心のチューリップ』

キャスター(元NHKアナウンサー)

須磨 佳津江

チューリップって特別の花だと思うのです。

♪咲いた咲いたチューリップの花が・・・という歌のせいかもしれないが、まっ先に覚えた花の名前がチューリップ。独特の花姿が描きやすく、お絵描きで描いた花もチューリップ。勿論、色は、赤、白、黄色でした。文房具の模様や、ハンカチの柄、幼稚園のクラスの名前にもチューリップ組があったことを覚えています。それは我が子も同じで、ピアノのおけいこに行くと、チューリップの出席シールを貼ってもらいおゆうぎでも小さな手を二つあわせて、おでこにチューリップの絵をつけて、一生懸命歌っていました。時代を問わず、心に深く刷り込まれたチューリップの花は、ひと筆書きで書けるような、ふつくらした王冠をデフォルメしたような形なのです。

だからかどうか解りませんが、私は赤い単純な形のチューリップが大好き。春咲くようにと、秋深くなって毎年庭にたくさん球根を植えています。

チューリップが、赤白黄色だけではないことは勿論知っています。

趣味の園芸を担当して八年、種が多

様性に目をみはり、思い込みの間違いに気づくこともしばしばありました。キャベツのようであまり好きではなかった葉ボタンも、とても可憐なバラのようなものがあつたりして・・・。ごめんねと謝りながら

見直し、好きな花の仲間に加えたりもしました。ガーデニングブームのせい、花の種類は年々増え、新規登録品種が年に五千近くあるとか・・・。チューリップといつても、八重咲きだったりユリ咲きだったり、地をはうように背が低かったり、すーっとのびていたり、色だって、赤白黄どころか黄緑色、紫、黒と、青以外は全部あるのではないかと思う程。そのどれも、かわ

いくて、みとれてしまうものの、やっぱり、チューリップというと、オーソドックスなあの形でないと、どこかで思ってしまう。植物分類学を無視した私の心の中の分類では、チューリップ対チューリップの仲間の素敵な花達という違いがあるのです。

陽をあびて開きすぎても、他の花になつてしまつたようで、あとひとつしつくりこないのですから、思い入れが強いとチューリップもかわいそう・・・。でもこうしたいは私だけではない

ようです。最近日本に、ちらほらと現れはじめたオープンガーデンに関心があり、訪ね歩いているのですが、これが個人の庭かと信じられないような見事に設計された個人の庭の春の花の海からニョッキリと顔を出すのは、やはりオーソドックスなチューリップ。豪華版のチューリップは他の花と一体化して寄せ植えに華を添えているものの、存在感では負けています。

ひいきのひき倒しなのかなとも思いますが、どんなに花期が短くても春に



▲マンネングサのなかから顔を出すチューリップ。

宮崎市のオープンガーデンで個人の庭とは思えない見事さ!!

どうしても見たくて、天使のおしりのような、ツルンとした球根をそつと土の中にしのばせるのは、お正月の松飾りのように日本人の心に定着した思いなのかもしれません。



▲改造した我家の庭。外に向けて花を植えた。春まずチューリップを目立たせて・・・。



▲チューリップの咲き終わった後に他の花が盛りあがる。

近頃はアイスチューリップという技術が進み、一年中、開花させることができるようですが、やっぱり春に咲いて欲しい花。一年中みられるのは四季彩館だけの特別のことに止めておいて欲しいのです。

人はぜいたくで、いつでも見たいし、人が見られない時に見たくなったりするものです。でも、それが特別なことだという感覚を失ったら楽しくも何ともなくなることでしょ。

技術も出し惜しみなくつちや！

長い冬の後、福寿草が春を告げ、次々と色々な花が咲き出しても気候はいきつ戻りつ・・・。チューリップが咲くともう寒さが戻らないなと春をしつかり確認できる・・・。その季節感は大切にしたいと思っています。

とはいっても、番組収録にあわせて花は咲いてくれないので、そうした技術があつてこそ、私たちは助けられているのですけどね。

人間ってホントに勝手！



▲三田市のオープンガーデン。敷き石も枕木もみんな手づくり。借家なので数年したら返す庭なのだから、びっくり！

略歴

すま かつえ



東京女子大学卒業後、NHKアナウンサーとして入社。朝のニュースショーキャスターなど、報道番組を中心に担当。結婚を機にフリーランスとなるが、NHKを中心にレギュラー番組を持ち、インタビューア、コーディネーター、エッセイ執筆など、多方面で活躍。

【主な担当番組】

「スタジオ102」「今日の料理」「子供ニュース」「婦人百科」「21世紀への科学」「マイコン入門」「ユースの窓」「テレマップ」「ウィークエンドワイド」他多数。平成十二年十月開局のCSチャンネル「ラトル」をジェネラルプロデューサーとして立ち上げ、キャスターもつとめ、軌道にのせた。現在は「NHK趣味の園芸」レギュラーとして九年目になる。

【現在】

都市緑化基金「緑の都市賞」審査員、全国花き品評会洋蘭部門審査員、世界押花芸術協会常任幹事、田園空間博物館整備中央委員会委員、花と緑あふれる日本のまちづくり協議会理事、放送大学アウンサー研修講師ほか

チューリップ文化をたどる

『チューリップ・ブック-イスラームからオランダへ、人々を魅了した花の文化史』より

チューリップ四季だよりも何度か紹介しましたが、近年、これまであまり知られていなかったチューリップの文化史に関する書籍が国内外で出版されています。今年二月末に八坂書房より出版された『チューリップ・ブック』には、チューリップの原生地の一つであるトルコやイランと、世界最大の生産地であるオランダを中心に、チューリップの文化史をたどる内容となっています。その中から一部をご紹介します。

『トルコとイランにおけるチューリップ文化』

イスラーム世界の中で古くからチューリップという同じ花を愛しんでいたイラン民族とトルコ民族。イラン文化圏では文学において、一方、トルコ文化圏では美術においてそれぞれ異なる手法でチューリップ文化を築いてきました。

イラン文化圏では、チューリップの花は文学において十世紀ごろから盛んに登場し、その中でチューリップの美しさが賞賛されています。

文学の中のチューリップは、鑑賞花として詠みこまれていただけでなく、人の顔立ち、頬、唇、若人の人体美としての比喩や美しい赤色のたとえとして詩歌に用いられています。それとは対照的に、イランの美術においてチューリップが現されることはほとんどあり

ませんでした。イランの絵画には楽園をイメージした庭園が盛んに描かれ、様々な花がそこに描かれています。チューリップはほとんど登場していません。工芸品においてもチューリップの文様は少ないようです。

これに対し、トルコ文化圏では、文学にチューリップが詠まれることも少なくなかったのですが、特に美術においてチューリップの美しさを表現することに力が注がれました。絵画に描かれたチューリップは、形や色あいだけでなく、チューリップの鑑賞法、花壇の形式、装飾品としてのチューリップなど、チューリップの文化についてのたくさんの情報を提供しています。また、タイルやスルタンの衣装、陶器な



▲トルコ・トプカプ宮殿タイル

どにその時期毎に人気のあったチューリップの花の形をモチーフとしても表わされています。

イラン民族もトルコ民族もイスラームという同じ文化圏に属し、共にチューリップの原生地の一つであり、相互に文化的交流が頻繁であったにもかかわらず、そのチューリップへの熱い思いを表現する手法が異なったのはなぜなのか、今日ではわかっていません。



『ラーレ (Lale)』 『チューリップ』

以前、四季だよりで「チューリップ」という名前の由来をご紹介しましたが、トルコで実際には「ラーレ」と呼ばれていたにもかかわらず、ちよつとした誤解によって「チューリップ」という名でヨーロッパへ伝わりました。では、「ラーレ」とは、どのような意味を持つのでしょうか？ チューリップの故郷であるイランやトルコの文化圏で、チューリップは現在でも「ラーレ」という語で表されています。「ラーレ」とは、七世紀半ばから今日にいたる近世ペルシア語で紅玉石あるいは赤色の宝石を表す「ラル (Lal)」が語源で、音声的变化が起こって「ラーレ」となったと言われています。初めは、赤い花を一般的に表していましたが、次第にチューリップを指すようになりました。トルコ語の「ラーレ」はペルシア語からの借用語です。



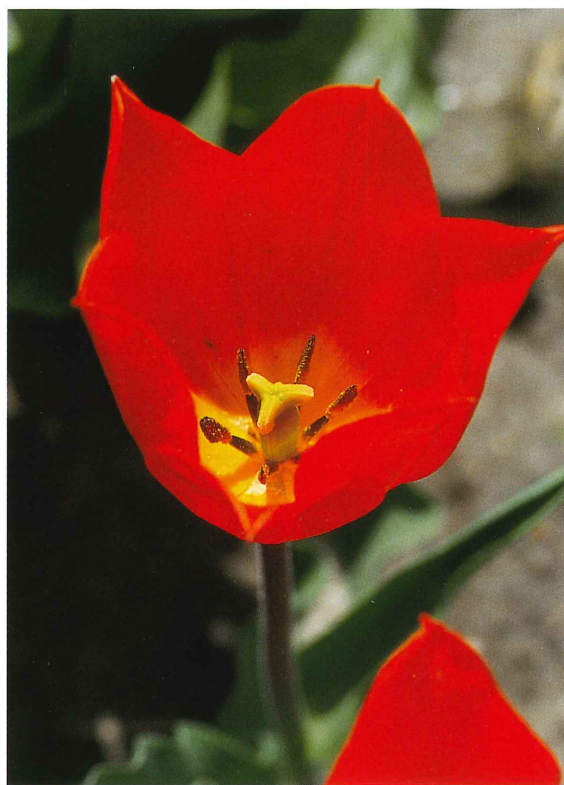
◀園芸愛好家たち
(個人蔵)

『オランダにおける 初期のチューリップ』

チューリップは現在、花の咲く時期と花の形によって十五に分類されています。オランダにチューリップが入った当初、クルシウスは早咲きで背の低いタイプの品種群と遅咲きで背の高いタイプの品種群があると記述しています。また、クルシウスは初期のチューリップを早生、中生、晩生など三十種類以上のグループに分類していました。このことから、当時から様々な形質を持つ品種が存在していたようです。

●学名「ゲスネリアナ」

現在、チューリップの園芸品種に一般的に与えられている学名、「ゲスネリアナ」は、一七五三年にスウェーデンの植物分類学者リンネによってつけられたものです。ヨーロッパで初期に栽培されていた品種に対し



ダック・ファン・トール・オレンジ▶



てつけられたこの学名は、ヨーロッパで最初にチューリップについて学問的な記述をしたゲスナーの名前に基づいています。今日では、当時、「ゲスネリアナ」と命名されたチューリップの品種を特定することはできませんが、現在の品種とあまり変わらない大型のチューリップであったと推測されています。

●ダック・ファン・トール

オランダでの初期の品種のうち、現在も残っている早咲き系の品種群はダック・ファン・トール系の品種と呼ばれています。オレンジ、オレンジ・アンド・イエロー、サーモン、プリムローズ、ローズ、ホワイトなどの品種があり、草丈は低く、やや早咲きで、四月中旬に開花します。今は栽培されていませんが、品種保存を目的とした保存園でのみ大切に保存されています。現在の品種に近い、いわゆるチューリップらしい花型と草姿をしており、近代チューリップのルーツともいえる品種群です。

海外
NEWS

南半球の球根生産

一九九九年、ニュージーランド産オリエンタル系ユリの球根が隔離検査免除となりました。現在までに隔離検査が免除となっているユリの品種は、アカプルコ、カサブランカ、スターゲザ、ティアラ、マルコポーロ、ルレーブ等を含む、三十三品種です。

隔離検査免除となった一九九九年当初は、百五十万球であった球根輸入量も、二〇〇一年産では約五百三十万球、二〇〇二年産では、当初の輸入量の十倍である千三百万球まで増加が見込まれています。

日本へこれらの球根を生産、輸出しているのは、オランダのBENZと呼

ばれる輸出協会グループに属する五社で、その栽培面積合計は七十ヘクタールです。すべてオランダの会社主導で行われており、北島のオークランド近郊に一社、南島のクライストチャーチ近郊に一社、南島最南端に近いゴア周辺に四社があります。それぞれの会社では、ユリ以外にも、フリージア、チューリップ等を生産し日本向けにも輸出しています。

隔離検査が免除されたことで、日本では、特に、暖地において抑制栽培によるユリの切り花生産を行う生産者にとって、これまでは冷凍による球根品質の劣化が心配されていましたが、南

半球で生産し、当年に収穫された球根を、そのまま日本に輸入して利用できるようなったことで、安心して切り花生産が行えるようになります。

各社が持つ生産圃場の気候条件は少しずつ異なりますが、この気候条件を分析し、最適地を模索すること、そして、掘り上げ時期や品種別の前処理期間等指導しながら生産を行い、より品質の良い球根を輸入することが日本側の課題となっています。

二〇〇二年産産からは南米のチリからの球根も隔離検査免除となること予想されています。

〈参考資料 農耕と園芸 平成十三年二月号〉

県内
NEWS

研究紹介

チューリップの新しい病気

しびとい媒介者が運ぶ新しいウイルス病

チューリップに関する唯一の国の指定研究機関である富山県農業技術センター野菜花き試験場では、古くから、チューリップの病気について研究が行われてきました。

チューリップの病気の中で最も被害が大きいののはウイルス病です。この病気になるかかると、チューリップの茎や葉に緑色の濃淡の斑点が現れ、赤や紫の花の花卉には白い斑点や濃淡のまだら

模様が入ります。

富山県では、水田の輪作という世界でも類をみないチューリップの球根生産を実施しています。球根生産においては土に関わる病気が問題となること

が多いのですが、水田との輪作を行うことで水田の浄化作用を利用することができま

す。ところが、近年、土によって伝染する新しいウイルス病の被害が増加して



▲砺波のチューリップ圃場



微斑モザイク病▲



▲従来のモザイク病

おり、水田との輪作という環境に適応した病気が、防除しにくいものとして選択されてきているようです。

この新しいウイルス病の一つ、微斑モザイク病に関する研究について、富山県農業技術センターから毎月発行されている情報誌、「とやま農技センターだより第六十三号」の掲載記事から一部をご紹介します。

一九七九年頃初めて発生が認められた微斑モザイク病は、その後長い間病原ウイルスが不明でしたが、一九九一年に病原と思われるウイルス、TMMMVが抽出されました。この病気が土壌中で伝染することは一九八五年頃に明らかになりましたが、土壌中に生息する媒介者（病気の運び屋）についても長い間不明でした。

植物につくウイルスの媒介者としては昆虫や線虫、菌類が知られていますが、媒介者を特定できればこの病気の流行を抑えることができるようになります。

そこで、まず初めに、土壌消毒試験が行われ、殺菌剤がモザイク病を防ぐ効果が高いことが認められました。また、効果の高い処理区のチューリップの根を観察すると、菌類の一種であるオルピディウム菌の寄生密度が極端に低いことが明らかになりました。

これらの結果に伴い、一九九七年にこの菌を用いてウイルスの伝搬の様子

を探る試験が実施され、オルピディウム菌が微斑モザイク病の媒介者であることが実証されたのです。

この菌は県内のほとんどの圃場に生息し、チューリップの他、マメ科、アカザ科、ウリ科、ナス科、イネ科等様々な植物に寄生します。ただし、一般的には無害で、この菌が寄生しただけでは植物に病気の症状は現れません。しかし前述のような微斑モザイク病の病原ウイルスを保持している場合は病気の原因となります。

このオルピディウム菌の活動適温は十五℃から二十℃程度で、十月のチューリップ球根の植付け時期の地温と一致しています。地温が低下する十一月中旬以降に植えると菌の活動が抑制されるなどの理由で、発病しにくくなります。また、水分量が多い状態でモザイク病が発病しやすいなどこの菌の生態とこの病気が深く関わっていることがわかっていきます。

チューリップ球根と水田との輪作は、球根の安定生産に様々な利点がありますが、この手法に適応した病気の発生など、以前には考えられなかった問題が起きはじめています。

今後は、遅植え栽培や抵抗性品種の利用等農薬を使わない実質的な防除法の他、土壌とそれを取り巻く環境の影響など広く研究がすすめられることが期待されます。

すべての植物は、その土地の気候や土壌など環境に適応した種が根付き、繁殖し、また、栽培されます。それと同様に、植物の病気もその植物の種類及び生育・栽培環境に適応したものが選択されることになるのです。そのため、病気を回避するにはその病気の生態を知り、その発生に好適な条件を避けることが確かな方法となります。前頁でも紹介しましたが、チューリップの球根生産においてますます厳しくなる国際競争の中、これまで以上に生産コストを削減するとともに、より高品質な球根を安定生産することが求められています。前述のような土壤伝染性のウイルス病をいかに克服していくかが、富山のチューリップの将来を左右する重要な課題なのです。

（参考資料）

とやま農技センターだより第六十三号
（野菜花き試験場花き課 守川 俊幸）



チューリップ四季彩館
からのお知らせ

2002 となみ チューリップフェア
～散居にひろがる 花のまち～

と き:4月25日(木)～5月6日(振休)

ところ:チューリップ公園・チューリップ四季彩館他

入場料:大人900円(団体800円)・小人400円(団体300円)

館内展示案内

○特別企画展

「散居の花物語」

冬の雪、春の花、夏の水辺、秋の夕暮れと散居村の美しい
四季折々の風景を光とチューリップで彩ります。

と き:4月20日(土)～5月6日(振休)

ところ:チューリップ四季彩館ホール



○常設展

「21世紀の日本の庭～春風～」

竹のフェンスや板塀といった和を基調に、チューリップ
やサクラなど華やかな春の花々で描く弧のモダンな
空間をお楽しみください。

と き:4月19日(金)～5月14日(火)

ところ:チューリップ四季彩館テラス



※チューリップフェア期間中(4/25～5/6)は
チューリップ四季彩館への単独でのご入場はできません。